

他者への共感能力を育てる

公民科 村 野 光 則

1. 「他者への共感能力」を育てることは可能か

数年前、教育実習生指導教員を対象とした懇親会が東京大学で開催された。私も本校卒業生で東大に進学した学生の教育実習を担当したので招待された。当日は、東大総長、教育学部長らも出席した。席上、教育実習および介護体験の報告を3名の学生が行った。その中で、灘高を卒業したという男子学生が自身の介護体験について報告し、次のような内容の感想を述べた。「私が介護体験を行った施設は、重度の知的障害者施設でした。介護体験にあたり、施設の職員の方からは、『初めて出会う方から見ると人間には見えないかもしれませんが、どうか一人の人間として扱って下さい。』と言われました。しかし、介護体験が終わる頃になってもとても人間には見えませんでした。」屈託なく差別的な発言をする学生に、私は大きなショックを受けた。もちろん、この学生は特殊な学生だったのかもしれない。経済的に恵まれた家庭で育ち、等質な生徒に囲まれて受験第一の教育を受けてくれば、他者への共感能力が育つ機会は乏しいであろう。しかし、現代において同様の育ち方をしている生徒も少なくはないと思われ、本校生徒の中に似たような生徒がいても決して不思議ではないと思った。

問題は、他者への共感能力を現在の教育現場で育てることが可能であるかということである。高校教育では知的な能力を伸ばすことが中心に行われている。高校における生徒集団のほとんどは偏差値で輪切りにされた等質な集団であり、高校の教育課程において、高齢者や乳幼児、障害者、外国人との交流を持つ機会はほとんどない。放課後は塾など、やはり等質な集団の中で過ごし、祖父母と同居している生徒も少ない。いじめや少年の凶悪事件が大きく報道されるたびに「こころの教育」の必要性が叫ばれるが、これまで高校のカリキュラムの中でそれが具体化されることはなかった。

一方で、高校教育においてこころの問題まで踏み込んでよいのかという難問もある。特定の価値観を植えつけることになれば、それは「洗脳」になってしまうだろう。そのため、この問題に取り組む際には、強制にならないこと、特定の価値観の押しつけにならないようにすることが肝要であると考えた。

2. 福祉施設の訪問

私は、現代の高校教育において必要なのは、年齢や身体的な条件などが大きく異なる他者との出会いの機会を設けることなのではないかと考えた。具体的には、核家族化によって日常的に接する機会が少なくなっている高齢者、そして、同じく日常生活において接する機会の少ない障害者との交流の機会をまず設定してみようと考えた。高齢者については、現在大きな社会的な課題である介護の問題も考える

ためにも、認知症の方々との交流を設定することとし、障害者は、知的障害者と視覚障害者との交流を設定することとした。高齢者に関しては、社会福祉法人東京都社会福祉協議会福祉振興部の中村孝一氏に本校近辺でこちらの目的に合った高齢者施設を紹介していただいた。障害者については、知人で養護学校に勤務する先生と、都立高校に勤務する視覚障害の先生に相談した上で訪問する学校・施設を選定した。障害にはその他、聴覚障害や肢体不自由、内部障害、精神障害等もあるが、聴覚障害については高校1年次の「現代社会」において取り上げ、聴覚障害者を授業に招いているので今回は除外した。その他の障害については、今回の取り組みの結果をみて対応を考えていくこととした。その上で今回は2年生を対象に、それぞれの訪問先ごとに参加希望者を募集した。結果的にはのべ21名の生徒が参加したが、中には複数の施設を訪問した生徒もいれば、特定の施設のみを訪問した生徒もいた。以下は、それぞれの施設の訪問記録である。

(1) 特別養護老人ホーム「くすのきの郷」訪問

- | | | |
|---------|----------------|------------------|
| ① 実施日時 | 2006年11月29日(水) | 午後1時～4時 |
| ② 参加生徒 | 2年生4名 | |
| ③ 当日の内容 | 12時30分 | 学校集合→徒歩で移動 |
| | 12時50分 | くすのきの郷着→更衣 |
| | 13時～ | 施設の方より説明
介護実習 |
| | 16時 | 終了 |

「くすのきの郷」は、1階に事務室、喫茶室等があり、2階～4階が高齢者の居住スペースとなっている。4階は重度の認知症の高齢者のフロアとなっている。また、この施設で人生を終える方も多いため、ターミナルケアも行われている。

当日は、はじめに施設の概要と高齢者介護についての簡単なレクチャーを受けたあと、2階から4階のフロアに1名ないし2名の生徒を配置した。そして各フロアの担当者の指導のもと、生徒たちは約3時間を高齢者とともに過ごした。当初、生徒たちは、高齢者とどのように接すればよいのか、何を話せばよいのかかわからず戸惑っていた。しかし、お年寄りの方から声をかけてくださったり、職員がお年寄りに生徒を紹介してくださったりした結果、次第に雰囲気になじみ、お年寄りとも自然に会話ができるようになった。生徒たちは一緒に切り絵に取り組んだりゲームをしたりして過ごした。私は各階を回って生徒の様子を観察したり、お年寄りとお話しをして過ごした。

今回初めて「くすのきの郷」を訪問して感じたことは、認知症のお年寄りも含め、入所している方々がとても落ち着いているということだった。以前訪問した高齢者施設では、認知症のお年寄りが自分でおむつをはずしてしまうのを防ぐために、自分では脱げないように背中にチャックのある服を着用させられていたが、この施設ではそのようなこともなかった。その点について質問すると、介護指導

専門員の芝田宏昭氏は、次のように説明してくださった。すなわち、この施設では、できる限り入所者のペースに合わせるようにしており、施設側のスケジュールにお年寄りの生活のリズムを無理やり合わせるということを極力しないようにしている。また、お年寄りがおむつなどをはずしてしまうのは失禁して不快なためなので、できるだけ不快な思いをさせないように常に気づかっており、そのため特別な服を着用させる必要がない、とのことだった。この施設は、身体拘束（認知症のお年寄りの徘徊を防ぐためにベルトで車いすに縛ったり、ベッドを柵で囲んだり、鍵をかけて部屋から出られないようにしたりすること）をしないことを原則としており、その点でも入所者一人一人を大切にしている施設であるという印象をもった。

ところで、打ち合わせの際、芝田氏から「他に何か聞いておきたいことはありますか？」と言われたので、私が「入所されている方への対応の留意点を教えてください」とお願いすると、「そうした考え方はよくないです」と言われてしまった。そして、高齢者との接し方について、次のようにアドバイスしてくださった。

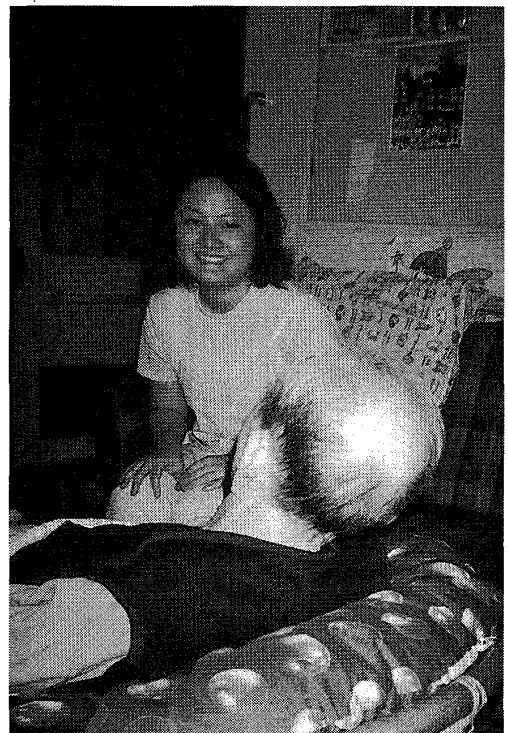
- ① どのようなお年寄りであっても一人の人間であるので、パターン化して接しようとするのはまちがいである。「こうすればうまくいく」的な対応法は存在しない。
- ② お互いに初対面なので最初は緊張するのが当たり前である。いきなり隣に腰掛けられて馴れ馴れしく話しかけられたら、お年寄りでなくても警戒するのが普通である。
- ③ はじめは手さぐりで、お互いの接点を見つけ出していくしかない。そのためにもとにかく話しかけていくことが大切である。
- ④ 明るく誠実に接したとしても、相性もあれば、そのときの気分もあるので、必ず相手に温かく受け入れてもらえるとはかぎらない。
- ⑤ 最近の言葉やカタカナ語は知らないことが多いので、あまり使わない方がよい。

私は、特別養護老人ホームの訪問を介護体験と位置づけていたが、実はきわめて実践的なコミュニケーション・トレーニングであることに気づいた。生徒たちは、人生経験がまったく異なる高齢者の方々とコミュニケーションをとることに、かなりのエネルギーを使ったようである。

〔生徒の感想より〕

「最初に説明をしていただいた中で印象的だったのは、認知症の方がネジを口に入れてしまったりすることがあるということと、最近の記憶から忘れていき、昔のことは最後まで残っているということでした。異食は一緒にいる人たちが気づかなければ大変なことになりうることだけれど、その行為自体を防ぐことは難しいから周りの環境を安全にしておく必要があると感じました。高齢者の方と会話することは意外と難しく、おっしゃっていることが聞き取れなかったり、緊張して何を話題にすればよいかわからなくなって話が续かなくなってしまったりと、いろいろありました。しかし、会話をしているうちに少しずつ慣れてきて、楽しく過ごせました。ちぎり絵を一緒にやっているうちに一人一人の個性が少し見えた気もしました。すきまをすべて埋めようとする方、色にこだわる方、自分の中の完成像をお話ししてくださる方など、いろいろな方がいましたが、ツリーの形が完成した時はみんな満足そうでした。おばあさん達は、自分の過去のこと（戦時中に私と同年だった方の話で、『今の平和な世の中で高校生という生活を送れて羨ましい』という言葉が印象的でした）や自分の子どもや家族の話を自らしてくださり、充実した時間でした。『生きていれば苦しいことやつらいこともあるけれど、楽しいことや幸せなことも絶対にあるのよ。』と語ってくださったおばあさんの言葉が心に残りました。ぬかづけをいただいた方はさすがに毎日やっているというだけあって手際がひじょうによく、驚きました。3時間はあっという間に過ぎてしまいましたが、口下手な私でも楽しく過ごすことができて本当に良かったです。良い経験になりました。ありがとうございました。」（A. Y）

「私は、小学校高学年の頃、一度今回訪れた文京区立特別養護老人ホームに行ったことがありました。小学生の頃は対面で接したのではなく、1階の広場のような所でおじいさんやおばあさん達に囲まれ、そこで歌を歌ったりゲームをしたりしました。また、折り紙と一緒に折ったりしました。今回も同じようにするのかと思っていましたが、先生から一対一からと言うことを聞いて、どう接すればいいかわからずすごく不安でした。老人ホームに行く前日祖母が家に来ていたので、何を話したら楽しく話せるか聞きました。それによって少し不安はなくなりましたが、いざ行ってみるとやっぱり緊張してしまいました。接する時間が近づけば近づくほど、私のような介護に無知な高校生が来ていいのかとか、会話がはずむかなど不安でいっぱいになりました。私は、老人ホームにいるおじいさんおばあさんは、会話も出来ず、寝たきりの人ばかりがいるのかと思っていました。しかしそれは私の間違いで、ほとんどの人がしゃべることができて普通の生活をしていました。洗濯物をたたんだり、新



聞を読んだり…。私は3～4人のおばあさん達と話しました。認知症のおばあさんと話すと、同じことを何度も何度も繰り返して、はじめはどう反応すればいいかわかりませんでした。認知症について何も知らない私は、何度も繰り返している事を、毎回はじめに聞いたかのようにすべきなのか、それとも『何度も聞きましたよ』と言った方が認知症にはいいのかわかりません。でも私は同じことを言っても毎回真剣に聞きました。そしたら、おばあさんも一生懸命話してくれました。無知ではあっても、どんな人であっても真剣に聞いたり、話せばいいんだなとわかりました。3～4人のおばあさんの一人が、『今日はすごく楽しいね』って言うてくれました。この言葉で今までの不安や緊張が一気にすっ飛びました。本当に本当にうれしかったです。また行って、元気になってもらえたらいいなと思います。是非また行きたいです。」(N. I)

(2) 東京都立清瀬養護学校訪問

- | | | |
|---------|----------------|---|
| ① 実施日時 | 2006年12月15日(金) | 午前 9 時30分～12時30分 |
| ② 参加生徒 | 2 年生10名 | |
| ③ 当日の内容 | 8 時50分 | 清瀬駅集合→徒歩で移動 |
| | 9 時15分 | 東京都立清瀬養護学校着→更衣 |
| | | 副校長山本先生より学校の概要説明 |
| | 9 時30分～ | 作業学習に参加（担当 飯塚先生） |
| | | （紙工班 2 名、木工班 2 名、清掃班 2 名、農芸班 1 名、陶芸班 1 名、
情報班 1 名、布工班 1 名） |
| | 12時30分 | 終了 |

知的障害は、障害の中でも最も偏見を持たれやすい障害である。街で目にする知的障害者は、奇声を発したり、意味のわからないことを話していたりすることもあるため、気味悪がられたり怖がられたりすることも多い。そのため、知的障害児との交流は、知的障害に対する偏見を取り除く上でも、コミュニケーション・トレーニングという観点からとてもよい経験になると思われる。

東京都立清瀬養護学校は、重度の知的障害児が入所している東村山福祉園が学区内にあるため、重度の生徒の割合が高い養護学校である。清瀬養護学校では、近年、入学してくる生徒が増加し教室が不足しているため、私たちが訪問したときも校舎の増築工事中であった。少子化にもかかわらず生徒が増加している原因として副校長の山本先生は、医療技術の進歩により、これまで助からなかった重度の障害児が生存できるようになったことを挙げられていた。また、近年は自閉的な傾向を持つ生徒と重複障害の生徒が増加しているとのことだった。男女比では圧倒的に男子が多く、これは生物学的な要因によるものではないかとのことだった。

当日は、山本先生から学校の概要を説明していただいたあと、体育館で高等部の3年生が文化祭の練習をしているということだったので、担任の飯塚先生の案内でその様子を見せていただいた。体育館では、約50名の生徒たちが集まってグループごとにステージの上で劇の練習をしていた。中には奇声をあげながら走り回る生徒や、急に立ち上がってステージに上ろうとする生徒、激しく飛び跳ねている生徒もあり、本校の生徒たちは一様に緊張した面持ちでその様子を見守っていた。飯塚先生は、そうした知的障害児の行動について、次のように説明された。すなわち、知的障害児の多くは、普段とは異なる場所や状況に置かれると、先の見通しを持つことができなくなるため不安が高まり、精神的にひじょうに不安定になる。その不安を何とか自分なりに解消しようとして、走り回ったり、飛び跳ねたりしているとのことだった。そのため、先生方はそうした行動を一律に抑制するのではなく、生徒たちの状態に応じて、あるときは抑制し、またあるときはしばらく様子を見ていたりするとのことだった。

こうした説明を受けたあと、生徒たちは次の時間の作業学習に参加した。作業学習では、障害の程度に応じて木工班や陶芸班などに分かれていた。比較的障害の軽い生徒は、パソコンで名刺の作成などに取り組んでいた。本校の生徒たちも、それぞれの作業班に加わって、木工や陶芸に取り組んだ。清瀬養護の生徒たちは、いつもと同じ作業なので落ち着いてそれぞれの作業に取り組んでいた。本校の生徒たちも、作業をする中で少しずつ清瀬養護の生徒たちとのコミュニケーションの回路を見出していった。知的障害の生徒とのコミュニケーションでは、言葉だけではなく、表情や彼ら（彼女）が発するさまざまなサインを理解することが大切であることもわかったようである。約2時間の作業が終わるころには、お互い緊張感も解け、楽しく交流できるようになった。

作業終了後、校長室で山本副校長と担当の飯塚先生を交えて簡単な報告会を行ったが、生徒たちは口々に清瀬養護の生徒たちのやさしさや素直さについて語った。それに対し山本先生は、ずるいことや悪いことを考えられるのは知的能力が高いためであり、彼ら（彼女ら）の多くはそうしたことを考えることができないゆえに、人間本来のやさしさや素直さが前面に出てくると述べられた。また、飯塚先生によれば、養護学校の卒業生の多くが福祉作業所や一般企業に就職するが、そこで最も大切なことはあいさつと、わからないときに「わかりません」と言えることなので、その点を徹底して指導しているとのことだった。たしかに清瀬養護では、廊下ですれ違う生徒も先生も必ずあいさつする。こうした点は本校生徒も大いに見習うべきであると思った。

[生徒の感想より]

「今回の訪問はとてもためになりました。行く前は、正直こちらが学校の皆の手伝いや世話をすることの方が多いのかと思っていましたが、全然違いました。教わってばかりでした。私よりきちんと仕事ができるし、人の言われたことに素直に応答できる、思いやりかあって人に優しくできる。私より『できる』ことがたくさんありました。障害者というと、できないことの方が圧倒的に多く感じるけれども、

本当はできることの方がずっと多いのかもしれませんが。障害者だからといって障害を持っていない人より劣っているわけではないし、何かをしてもらっただけじゃない。そういうことを身をもって理解できました。バスの中や、通りを歩いている時、知的な障害を持っている人々を見かけるとなんとなく『怖い』と思わずにはいられませんでした。なんであんなに大きな声をあげ



ているの？なんで一人で話しているの？わからないこと、知らないことが恐怖感を抱かせました。でも今回、学校を訪問し、学校の先生に『ああいうふうには走っているのは、気持ちを落ち着かせるためなんだよ。』『今あの子は、なんで自分がここにいるのかわからなくて不安なんだよ。』などと説明していただいたのをきっかけに、自分でも驚くほど恐怖感がなくなりました。重度の知的障害者の中には、人のことを叩いてしまったりという人もいるので、そこは注意しなければいけませんが、これからは街中で障害者の方を見かけても、『きっと不安なのだろうな』と思えることにより、怖いとは感じないと思います。」(A. K)

「重度の障害がある同じ位の歳の子と接する……このような機会が今までなかった私は、清瀬養護学校に行く際とても緊張していました。『暴れだすことがあるかもしれないけれど、変に構えたりしないようにね。』というようなことを養護学校に行く人が集まったときに村野先生がおっしゃっていたことを思い出し、あまり構えず、自然に接するように心がけようと意識しながら校門を入りました。しかし、体育館で文化祭で行う劇の練習風景を見学していた時に、生徒が走ってきたりするとすごく構えてしまいました。床にぶつかってしまうんじゃないかと思うくらい、頭を上下に動かしている子を見た時は、なんだか異様な光景だったので怖いなと思ってしまいました。班活動に分かれたときも、うしろの席に大きな声を出して騒いでいる子がいて、なるべく見ないようにしていました。木工班担当の先生とはしゃべるけど、生徒とは自己紹介をして以来話をしませんでした。どういうふうにコミュニケーションをとっていいのかわからず、黙々と塗装をする作業をしました。途中で、私の塗装の仕方がおかしい点はないかどうかを生徒に質問してみたところ、私が塗った板をよく見た上で、アドバイスをしてくれました。そのアドバイスの仕方がとても親切で、しかもおもしろかったので、私は少し打ち解けることができました。その後も、少しずつ会話をしたり、先生と生徒の会話に笑ったりしながら過ごしていました。時間はあっという間に過ぎてしまいました。作業が終わったあとの掃除の時間は、生徒たちとたくさんしゃべれたのでとても楽しかったです。話を一緒にした子はみんなとても素直で清らかで、目がキラキラしていました。話を一緒にしなかった子も、様子を見てみるととても素直でした。作業が終わった時には、私の心から“なんだか養護学校は怖い”という気持ちはなくなり、素直で私の心まできれいにしてくれる人たちともっと一緒にいたいと思いました。」(M. O)

(3) 国立身体障害者リハビリテーションセンター訪問

- ① 実施日時 2006年12月18日(月) 午前 9 時30分～12時30分
- ② 参加生徒 2 年生 7 名
- ③ 当日の内容 9 時30分 新所沢駅（西武新宿線）改札集合→徒歩で移動
 10時～10時30分 ビデオ視聴
 10時30分～ センター内見学、視覚障害訓練士からの説明
 12時30分 終了

障害の中でも視覚障害は、車椅子の障害者と並んで目に見える障害である。視覚障害者は道路を通行する際、道路交通法で白杖の携行が義務づけられているので、すぐに視覚障害であることがわかるからである。しかし、「視覚障害＝全盲（何も見えない状態）」と思い込んでいる人も多く、社会において視覚障害についての十分な理解がなされているとはいいいがたい。また、視覚障害に限らず、障害者福祉に対する施策は当事者の意見を聞かずに立案されることが多く、障害者のニーズに的確に応えるものとはなっていない。また、私たちの障害者に対する援助もとにかくパターン化しがちである。視覚障害者なら手をひいてあげればよい、聴覚障害者ならば筆談でやりとりすればよいなど、必ずしも間違いではないものの、往々にして障害者の個人差を無視した対応をしがちである。ひとくちに視覚障害と言っても見え方は千差万別であり、必要な援助や方法も人それぞれである。そのため何より大切なのは、相手にどのような方法で援助すればよいかを尋ねることなのである。やはりそこでも、他者への共感能力とコミュニケーション能力が問われてくるのである。

今回は、視覚障害についての理解を深めるため、国立身体障害者リハビリテーションセンターを訪問することとし、同時に視覚障害者へのガイドヘルプの方法を実践的に学ぶため、東京都立小平高等学校公民科教諭で視覚障害者の山口通先生にご同行をお願いした。そして、山口先生と事前に打ち合わせた上で、集合場所の新所沢駅から交代で生徒たちに山口先生のガイドヘルプをさせることにした。

センターでは、施設の概要をビデオで見せていただいたあと、担当の方の案内で広い施設内を見学して回った。同施設では視覚障害だけでなく、さまざまな障害を持った方々のリハビリテーションと生活訓練、職業訓練などが行われている。それぞれのスペースでは、身体障害者の機能訓練が行われていたり、視覚障害者の調理訓練が行われていたり、就労支援のためのパソコン実習や資格取得のための授業などが行われていた。それらを見学した後、会議室で視覚障害訓練士の方から、視覚障害に関するレクチャーを受けた。視覚障害について医学的に説明していただいた上で、特殊なメガネを使っているさまざまな視覚障害を体験させていただいた。レクチャー終了後はレストランで昼食をとりながら、視覚障害者と食事をする際の援助方法を山口先生に教えていただいた。

[生徒の感想より]

「視覚障害には、生まれつきの障害と中途障害があること、また全盲の方は少なく、少しは見える状

態の方のほうが多いということは知っていた。しかし、その少ししか見えていない状態というものを、今回のセンターの見学で眼鏡をかけて体験することができて良かった。これから私がもし視覚障害者になってしまったら、今日のこの経験があるのとないのでは心の持ち方もまったく変わってきってしまうだろうし、この不便さを知ること、今まで何も考えずにいたけれど、目が正常に機能しているという幸せをひしひしと



感じる事ができた。センターを見学して、さまざまな障害に応じて、さまざまなリハビリがあり、日常生活に必要な調理などの動作まで訓練するとは思っていなかったのが驚いた。山口先生との歩行で、短い距離しか歩いていないのに、視覚障害の方には不便だと感じられる場所がいくつもあり、バリアフリーになってきているといわれる現代社会も、障害のある方から見ればまだそうとは言えない部分が多々あるということを実感した。障害者自立支援法という法律が、一見すると良いことのように見えるけれど(名前が)、実際は障害者の方を家の中に引きこもらざるを得ない状況を作る法律だという山口先生のお話を聞いた。障害のない人が、ある人も自分と同じように生活できるようにしていくべきなのに、逆に二者間の差を広げるようなことをする人たちがいて、それが受け入れられている今の日本はどうかしていると思った。今回の見学でもいろいろなことを学び、考えることができて良かったと思う。」(A. Y)

「センターまで山口先生に右肩をお貸ししながら歩いた。視覚障害のある方と一緒に歩くのは初めてだったので、要領を得られず、先生には迷惑をおかけしてしまったことと思う。例えば、自分は木の枝を払って歩けるのでそのまま進んでしまったり、バリアフリー用品の展示コーナーでは、「ここはどのような場所ですか？」と先生から尋ねられるまで黙ったままできてしまったり…。センターの紹介のVTRを見ている時、村野先生がちよくちよく映像の説明をしているのを聞いて、それがマナーであることと、とても申し訳ないことをしてしまったと反省しました。ロービジョンの話がうかがって、視覚障害者のうち全盲の方は約2割以下であることや、見え方のパターンもいろいろあることなど、驚くことが多く、いかに視覚障害について知らないかがわかり唖然とした。池袋駅などでも白杖を使っている方をよく見かけるし、また白杖を使っていなくても視覚障害を持っている方もいらっしゃるの、身近でないことではない。今までバリアフリーについての授業を受けてきたりして、バリアフリーについて考えてもいたけれど、障害者の方たちについてあまり知らずにバリアフリーを進めるべきだというのは問題でもあるなと思った。」(S. M)

3. まとめと今後の課題

今回生徒たちが交流したのは、認知症の高齢者や知的障害児、視覚障害者等の、生徒たちとは年齢も

身体的な条件も大きく異なる方々であった。そして、いずれも援助が必要な方々であった。こうした方々と交流する際、何より大切なのは相手とのコミュニケーションの回路を見出していくことである。そして、それは何か決まったパターンがあるわけではなく、相手に応じて見出していかなければならない。そこでは言葉だけではなく、表情や相手が発するサインを解読することとても重要となってくる。そして、思いやりや想像力といった他者への共感能力が必要とされてくる。これは、高齢者や障害者だけでなく、異なる文化を持つ人々との交流においても必要なことである。さらにいえば、人と人との関係においても基本となる能力なのである。

感想を読むかぎり、生徒たちはそうしたことを学びとってくれたようである。また、交流を通じて、これまで抱いていたイメージや思い込みが修正されたり、新たな発見をしたようである。何より、相手とつながり合えたことが生徒たちに大きな喜びを与えたように思う。こうした経験を積み重ねていくことが、コミュニケーション能力を伸ばし、他者への共感能力を養うことにつながるのだと思う。

今後は、今回の結果をもとに、訪問する施設やそこでの体験内容についてさらに検討し改善しながら、より効果的な交流のあり方を探っていきたい。私としては、できるだけ多くの生徒にこうした経験をさせたいと考えているが、現実には受け入れ側の事情もあり、多くの生徒を一度に訪問させることは不可能である。また、少人数だからこそ、密度の濃い交流ができるという面もある。そうした点を勘案しながら、来年度のプログラムを立案していきたいと思う。⁽¹⁾

- (1) 授業の中で施設を訪問する取り組みを行っている高校もある。長野県立東部高校では、「コミュニケーション授業」の一環として、幼稚園を訪問し交流を行っている。東部高校ではスポーツおよび福祉コースの生徒が、年間15回にわたって幼稚園児と交流している。（『キャリアガイダンス [プラス]』2005年11月号、リクルート）